

## 第14回NADCP ドラッグコート専門家会議に参加して

事務局長 尾田 真言

全米ドラッグ・コート専門家協会のミズーリ州セントルイスで開催された第14回NADCPトレーニング・カンファレンスに、2008年5月28日(水)から31日(土)までの4日間参加してきました。今年で、6回目になります。今年3月に日本に来日して講演をしていただいたジェフリー・ロジネック判事には、初めて会うことができませんでした。予算削減のためということで、毎年15人程度このカンファレンスに参加していたマイアミ・デイド郡のチームは、今年はわずか5人だけで、ロジネック判事は今年の8月15日に退官し、後任のデボラ判事がマイアミで3人目のドラッグ・コート判事になると紹介されました。



セントルイスのアーチ

今年のテーマは、「ドラッグ・コートをさらに推進しよう：健全な家族とコミュニティの癒し」というスローガンでした。

昨年からドラッグ・コートの卒業生が自己の体験談を語るようになっていますが、今年は特に少年の体験談が取り入れられました。2日目の午前中のセッションでは、サンディエゴ郡の少年ドラッグ・コートに今参加中の少年と卒業生による、体験談があり、卒業したばかりの18才の女の子が途中で泣きながら自分の薬物使用体験を語ったり、17才の男の子が、今、第3段階にいて、あと2週間で卒業予定になっているという話をしたりしていました。

毎年、毒物学者のポール・カリー教授のセッションは人気が高く、すぐに満席になるのですが、今年は、「ドラッグ・テストの101の常識」、「薬物検査で陽性反応が出た人の1001個の信じられない言い訳」というセッションがあり、特に後者は1000人位入れるシアターで開催されました。ドラッグ・コートで薬物検査は必須のプログラムの一つですが、ドラッグ・コート判事をはじめとするスタッフたちは、常に正しい知識を求めて勉強しています。

また、今年初めて、唾液検査キットについてのセッションが開かれました。薬物検査と言えば、尿検査がスタンダードで、どこのドラッグ・コートでも尿検査をやっているのですが、唾液検査キットを製造しているVarian社のスタッフとニューヨーク州の保護観察官の2人が、唾液検査キットの方がドラッグ・コートで尿検査に比べてより簡便であるという話をしていました。

今年の特徴は、ドラッグ・コートの発展形態である、問題解決型裁判所の中の、飲酒運転裁判所に関するセッションの増大です。新しい治療方法やアルコール検査キットの使用方法についてのセッションが目立ちました。たとえば、アメリカで2006年4月にFDAに承認されたアルコール依存症の治療薬ナルトレキソン(Vivitrol)を販売しているAlkermes社が、大きなオレンジ色の布製バッグを全参加者に無償で配布したり、DWIコート(飲酒運転者のための裁判所)でこの注射薬を用いたプログラムが開始されていることについて、わが国でも有名なペギー・ホラ元判事を交えたセッションが開かれました(<http://www.vivitrol.com>)。

この治療薬の特徴は、カウンセリング等のプログラムと併用することで、コントロール飲酒を可能にするというものです。Vivitrolを注射することで、飲酒に伴う至福感、高揚感が得られなくなり、気持ち良くなれないことで、アルコールを飲む理由がなくなり、飲酒量が減っていくというものだそうです。

抗酒剤(シアノマイド)が、アルコール成分を分解しないようにすることで服用中にアルコールを飲むと死ぬほど苦しむことでアルコールから遠ざけようとするのとは異なっています。

ちなみにホラ元判事は、2006年に21年の判事生活を終えましたが、現在、全米ドラッグコート研究所(NDCI)の上級裁判官研究員をしておられます。Vivitrolのセッション以外では、「すべての裁判官が精神障害について知っておくべきこと」というセッションにおいて、ドラッグ・コート参加者の中には精神疾患を重複している者が多いので、その各種対応方法を理解しておかなければならないという講義をしていました。

次回、平成21年の第15回大会は、カリフォルニア州のアナハイム、平成22年の第16回大会はボストンで開催されることになっています。次回の特徴は、プロブレム・ソルビングコート(問題解決型裁判所)のセッションのために1日開催日を延長することになったことです。



マイアミチームと夕食を囲んで



セントルイスの街並み



左がデバラ判事と右が尾田